

〈書評論文・書評〉[書評]

井出祥子・藤井洋子(編集)

『場とことばの諸相』(シリーズ 文化と言語使用 2)

2020, 東京: ひつじ書房, vi + 293p., ISBN 978-4-89476-792-8

田 中 廣 明

京都工芸繊維大学・名誉教授

1. はじめに

本書は、井出祥子氏が、共編者の藤井洋子氏らとともに長年牽引し、主張している「場の語用論」を、その理論と実証の両面から発展させた論集である。執筆者には、我が国で気鋭の研究者をそろえ、計9本の論考はきわめて充実した内容となっている。また、よく知られているように、本書は、西田幾多郎の「場所(場)の哲学」が基盤となっており、それを継承している清水博、William Hanks との共同研究であることも強調しておかなければならない。

井出(本書所収: 6-7)で述べているように、「場の語用論」とは、話し手を全体の一部と考え、「話者は自己の内側に場の全体を映し、全体の中に位置づけた自己を自覚して話すという発話モデル」であり、「発話のコンテキストや発話の状況といった発話に関わる場の要素が、全体の内側に自己と共に不分離の状態で存在すると捉え」られ、「全体にはいろいろな要素が相互作用して絡み合って存在しているが、話者はその離れがたく繋がっている諸要素の一部が自分であるとの自覚を持って話すと考え」とされる。

ここで述べられているのは、評者から見れば、いかに全体(場)と個(要素あるいは話し手)が相互行為(あるいは相互依存)を行うかという命題であり、その意味で従来の(西洋の)語用論研究にはない視点を持つと思われる。本書は、西田哲学に倣って、単に要素間の相互作用だけではなく、要素、あるいは要素間の関係を包摂することで成立する全体(場)の存在を仮定している。

では、個と個の持つ様々な知識、信念、あるいは属性を有機的に結びつけ、一つの「場」と呼べるものに成立させるものは何であろうか。例えば、露木(2019)は、「場」が成立する条件に、伊丹(1999, 2005)に代表される経営学における「場」の取り組みから「場」という概念の利点は、第1に「場」の中では個人の自律と全体の統合が可能になること、第2に「場」においては情報秩序と心理的エネルギーの両方を供給できること、第3

に、予測不可能な事態に対しても「場」が自発的なグループを創発して対処しうることである」とする。井出に代表される「場の語用論」から伊丹たちの立場を見ると、1は「全体（場）と個（話し手）との相互作用」、2は「（間）主観性」、3は「創発性」に相当すると思われる。本稿では、井出が準拠している清水（1996, 2000, 2003, 2004, 2009）、Hanks（2000, 2016, 2017）、Hanks et al.（2019）から1を解説し、その中で「場」を構成する要因として生じる2と3にふれながら、各論文から「場」の形成過程を見ていくこととする。

本書の構成は次のようになっている。詳しくは、本書の「まえがき」と各論文を参照されたい。

井出祥子 「場の語用論—西欧モデルを補完するパラダイム—」

山口征孝 「場の語用論構築に向けて—場の哲学と実践理論からのアプローチ—」

藤井洋子 「日本語の「場」志向性と述語主義を考える—英語との比較から—」

井出里咲子 「語りにおける声の共鳴—〈場所的領域〉にみるあいづち、薄い笑いと引き込み現象—」

多々良直弘 「フットボール実況中継の日英語比較—場の理論の観点から—」

難波彩子 「同調から広がる会話の一体感—場の理論による解釈—」

堀江薫・古田朋子 「「場の語用論」からみた介護現場の言語使用—入浴介助におけるスピーチレベル・シフトと融合談話に着目して—」

片岡邦好 「バーチャルな「場」における言語と身体—道案内データから考える—」

スコット・サフト 「「場」の論理のノ・ワイ語、ノ・ワイ文化への応用—一次的な場と二次的な場およびそれらの普遍性の示唆—」

2. 清水と Hanks による「場」と主客（自他）非分離

清水と Hanks は、西田幾多郎の場所の哲学に倣って、「場」をそれぞれ2つの領域（「遍在的領域」と「局在的領域」）と3つの存在論的区別（「第一の場」、「第二の場」、「第三の場」）を行っている。「遍在的領域」は「第一の場」に相当し、「局在的領域」は「第二の場」に相当する。詳しくは、井出（本書所収：18-21）、山口（本書所収：39-44）を参照していただきたいが、ここでは西田の「純粹経験」「主客非分離」に限って話を進める。山口（本書所収：42）によれば、「第一の場」（「遍在的領域」）は、西田の純粹経験に相当し、主客（自他）非分離で主体と客体の区別がなく、言語化できないレベルである。例えば、山口（本書所収：41）が引用している城戸（2003: 277）の例では、「鐘の音を聞く刹那」や「花を見る刹那」と言った、「ことばでは言い表せない主客（自他）非分離」な状態のことを言う。Hanks et al.（2019）では、この領域に、柳生心陰流による原理と刀法（自他の区別をなくし、絶対無へと至ること）を例に挙げている。このように、この領域の前言語

的な「純粹経験」は、清水の言葉では「遍在的」であり、普遍的に存在するとされる。¹ この領域の経験をいったん言葉で分節すると、それは「第二の場」（「局在的領域」）に属し、自他（主客）は分離され、主体化・客体化（主観化・客観化）がその瞬間に達成される。この「第二の場」は、英語で言うと、コンテキスト、状況の持つ意味に近いとされる（Hanks et al. 2019）。第三の場は、Hanks 独自であり、第一の場と第二の場をつなぐメタ言語的な領域である（山口 本書所収：42）。²

では、「場」はどのように形成されるのであろうか。先述したように、「場」の形成には、全体と個の相互作用（あるいは相互依存）が必要である。清水、Hanks を解説・援用した山口（ibid.）、藤井（本書所収）によると、評者の言う相互作用とは、第一の場が第二の場を「包摂」するところにあるとされる。主客（自他）が分離されている第二の場の指示対象や経験を、非分離な状態の第一の場で「包摂」することにより、本書が扱っている主客非分離の言語現象が見られることになる。また、主客非分離だからこそ、日本語に特有な言語表現と言うことになる。

同じく、主客非分離を扱う考察のひとつに、認知言語学では、中村（2009, 2016）の I モード、D モードがある。例えば、日本語の「寒い！」は、「S（主体）と O（客体）の距離ゼロ認知を反映」し、「S は寒いという感覚 O を造り上げる要因として関与していると同時に、自分の中に寒さを感じている」とし、S と O の間の「相互内包型のインタラクション」の I モード認知とされる（中村 2016: 32）。中村（前掲書：31）は、対峙するという意味での主体と客体の関係が成立しない「寒い！」のような「感覚が表出する」表現の存在を、日本語に独特な主客非分離としている（感覚の「描写」ではない）。

この両者の違いは、小さいようで大きいのではないと思われる。「場」の論理では、主客非分離の供給元は、それが存在する「第一の場」であり、I モード認知では、主体と客体のとらえ方である。また、何と何が相互作用をしているかについても、前者は全体としての「場」とすでに一体化した「主体と客体」であり、後者は IS (immediate scope) という認知領域の中での主体と客体である。³

藤井（本書所収：71-72）は、「場」の持つ全体描写（ホリスティックな描写）について、「日本語は …（中略）… 場面や状況から物事や出来事を取り出し、客体化することをしな

¹ その意味で「遍在的」であり、「偏在的」ではないことに注意。

² 西田哲学での「場所」と「場」については、山口（本書所収：39-40）を参照のこと。「場所」は、物事を考えるときに映し出される場所としての「意識の野」とされ、「場」は「意識の野の集合であり、共通認識が形成された「場所」とされる。

³ もちろん、中村も含めて、認知言語学が、いわゆる「認知の場」と呼べる領域を無視しているわけではない。池上（1987, 2007, 2008）が述べる「事態把握」とその一部である日本語に特徴的な「主観的把握」の図式は、まさにそれを議論しており、廣瀬（2016）の「公的自己」「私的自己」も、状況把握を「報告する」自己と考えるか「思考する」自己と考えるかで区別している。

いため、場面全体を内からの視点で描写する傾向にある」と述べながら、「鐘の音が聞こえる」「叫び声がしたぞ」「すげえ笑い声」の例を挙げ、日本語はこれらの「状況をそのまま描写」し、「場面全体として捉え、表現する」傾向の高い言語であるとする。このことは、日本語が、話し手（主体）が全体の状況を取り込むのに適した言語であると言える。全体の状況を取り込むとは、逆に言うと全体の状況を「喚起」と言うことができる。「聞こえる」「したぞ」「すげえ」といった「非能動的な」表現（cf. 井出 本書所収：22-23）は、慣習的に「話し手主体に限定の形式に語彙化され」（上原 2016: 86）、周りの状況まで映し出すことができる。

こうした意味での、内在的な視点、そこからの全体と個の相互作用を表す例に、井出が以前から取り上げている川端康成の『雪国』の冒頭部分がある。

- (1) 国境のトンネルを抜けると雪国であった。⁴
- (2) a. The train came out of the long tunnel into the snow country. (E. Seidensticker 訳)
- b. As we emerged from the long tunnel linking our two northern countries, the snowland lay before our gaze. (カーカップ・中野 1973: 141)

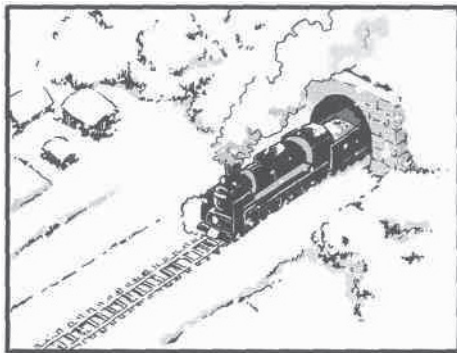


図7 ‘The train came out of the long tunnel into the snow country.’

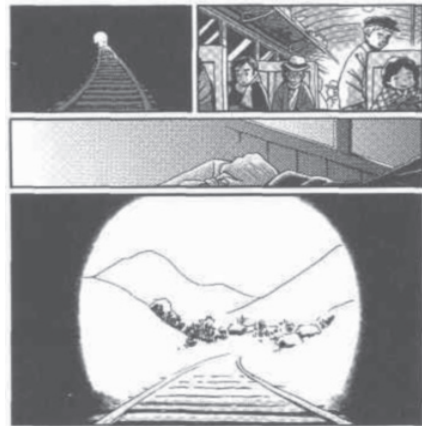


図8 「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」

⁴ 川端康成がノーベル文学賞を受賞した対象作品のひとつとして数えられる「雪国」の冒頭部分は、日本の美を抒情的に表現した名文として知られている。まず、この文の主語が誰であるのか（主人公の島村という説が主）と、それがどこから感じられるのかと言う問題がある。藤井（本書所収：68）が山口（1998）から指摘している主人公の判断を表す「であった」が、内在的な視点を取るのに大きな役割を果たしていることは間違いないであろう。少なくとも英語には、この種の端的な表現を、この翻訳文には組み込めなかったのではないかと思われる。

評者は試みに、上に転記した井出（本書所収：15-16）にある図7（(2a)の英語を描いたとされる上からの俯瞰図）と図8（(1)の日本語を描いた列車内部からの図）のどちらが、(2a)と(2b)の英語に合うかを英語母語話者に尋ねてみた。基本的には、図7は(2a)に、図8は(2b)にマッチするという回答を得たが、⁵(2a)でも図7、図8のどちらにも描くことができるという人もいた。⁶しかし、おそらくは、(2a)から図8(=(2b))へ到達するには、かなりの推論や読み込みが必要ではないかと思われる。さらに、たとえ到達したとしても、(2b)の英語では、weと自動的に主語が付けられている分だけ、どうしても主体としての意識が出てしまい（主客分離）、状況と主体との一体感を表現することが難しいとされている（藤井（本書所収：78）の(13)の説明を参照のこと）。

ただし、川端康成がノーベル文学賞を受賞する端緒となったこの翻訳は、「列車」から「トンネル」へ、さらに最後には「雪国」へと、3個の名詞を線状的に並べることで、物語の時間・空間軸に沿った流れを端的に表現しており、日本文学の英語翻訳としては優れたものとなっていると言って良いだろう。⁷

3. 「場」への転換点とその動機付け

本書の各論考に共通するのは、「場」の形成過程、あるいは「場」への転換点を見つけ出す作業をしているところであろう。Hanks、清水流に言うところ、主客（自他）が分離されている「第二の場（局在的領域）」から、いかにどういうきっかけで主客（自他）非分離の「第一の場（遍在的領域）」を含んだ（相互作用を経た）「場」の領域へ進むかという問題意識を各論文とも持つように思われる。その点をそれぞれの論文の用例からいくつか拾い出すことにする。

山口（本書所収：52-54）のデータ(5)について。（倉本）「最終シーン」から（倉本）「最後に戻ってくるシーン」、さらに（阿川）「物語のエンディング」と言い換えが並び、最後の阿川の「エンディング」に込められた感情に訴える言い換えで、倉本と同期し「場」を

⁵ ただし、(2b)が内在的視点を表すかどうかは疑問である。主語のweは小説の読み込み不足であると思われ、また、主体が客体と一緒にになって雪国に入っていくという視点の操作もなされていない。事実を淡々と外から述べている文だと思われる。

⁶ 直観的な判断を聞いたので、確たることは言えないが、このことで即、英語話者も日本語話者と同じように内在的な視点を取るとは言えそうにない。

⁷ 映画版の「雪国」は、1957年の東宝版（池部良（島村役）、岸恵子（駒子役））と1965年の松竹版（木村功（島村役）、岩下志麻（駒子役））があるが、両方とも、列車から見たトンネルを抜ける場面から始まっている。漫画版の「雪国」も同様に列車から見たトンネルを抜ける場面から始まり、その後列車を横から俯瞰する絵で雪国の中に入ったことを描写している（空木朔子（著）、川端康成（原著）（2010）『雪国（ホーム社 MANGA BUNGO シリーズ）（ホーム社漫画文庫）』東京：ホーム社）。

形成しているとみられる。インタビュー番組の司会者によく見られる言い換えであるが、当然のこととして、視聴者を意識しており、そのため、ここでは印象的な言葉選びが意識的になされている。

次に井出里咲子（本書所収：114-116）の抜粋（1）に見られる「わ：：：：+薄笑い」（18行目の発話者B）、多々良（本書所収：146-149）の用例（7）「相手が来てる」「…蹴らなきゃ」、さらに難波（本書所収：177-179）の（7-2）の「あ、すみませ：んバイトはいます：」などの引用に共通してみられる現象は、他者の心の内を自分があたかもそこにいるようにして表現する「内的引用」であるとくくることができる。⁸ 内的引用は、メタ表示（他者の発言・思考・命題を、自己の発言・思考・命題に表示する（Sperber 2000）である分だけ、自己と他者が同期しやすい環境を作っていると言うことができる。このメタ知識は私だけではなく、他者一般の知識でもあることを聞き手に保証しており（田中 2019: 29, 注 13）、他者理解（共通基盤化）が、「場」の形成の端緒となっていることを示している。

こうした他者理解へのプロセスが、難波（本書所収：174-175）の（7-1）や、堀江・古田（本書所収：216-217）の（10）（事例6）にも見られる。前者では、「へえ」などを使い、相手が述べる状況の理解を深め、後者は丁寧体を使いスピーチレベルシフトを行うことにより、あえて「自的己（第二の場）」に戻してすでにあるはずの状況の理解を聞き手に確認していると考えられる。両者とも、相手との同期や同調を行う合図としての「装置」が多用されており、上述のメタ表示の使用と同じく本書で主張されている「場」の形成の端緒となっている。

ジェスチャーといったマルチモーダルな表示が、バーチャルな「場」で見られるとしたのが、片岡論文である。最も興味を引くのは片岡（本書所収：255）が「バーチャルな場の創出」と呼んでいる抜粋（7）である。ここでは、イマ・ココで話している地図上ではなく、現実の「東山通り」に身を移して「左折」に始まる言語使用とジェスチャーの使用が始まっており、上述したメタ表示としての働きを持つと考えることができる。メタ表示の機能は他者の思考を自己に表示させるだけでなく、話し手も聞き手もよく知っていると考えられる概念上の知識からの表示にも当てはまる。抜粋（7）に至るまでの言葉使いとジェスチャーの使用をよく観察してみると、片岡の言うとおりの、「場」への形成過程がよく見て取れ、そこに進むプロセスが明らかになっている。問題はなぜ（7）が出現するに至ったかであろう。おそらくは、抜粋（6）と（7）の間に、話者間で（例えば、まだまだ理解が足りないといった）大きな認知上の隔たりがあるのかもしれない。

⁸ ただし、井出里咲子（本書所収：115）の分析では、このBの発話はB自身の感情（驚き、恐怖、焦り）の発現と両方の意味で曖昧であるとされており、感情発話が本来主観的な表現であるが故に、さらに話者自身の感情か、相手の感情を代弁するかは分かりにくくなっている。

ここまでは、日本語の「場」の形成過程を扱う論文であった。最後に、非常に興味深く、また本書の（ある意味）「中核」として機能していると思われるのが、サフト論文であろう。なぜなら、このハワイ文化に根ざす「場」の理論への適用がなければ、本書が日本文化だけの理解になってしまっていたからである。また、サフトが紹介している「クム・ホヌア・マウリ・オラ」や「モオクアウハウ」の哲学は、「場」への形成過程の各段階あるいは最終段階で出現する日本語に特徴的な様々な「装置」とは異なり、言語慣習的に、また逆に使用慣習的にハワイ文化に深く根ざしている「装置」と読み取れるからである。

4. おわりに

本書で、井出（2006）、井出（2016）、藤井・井出（編）（2016）などで、井出氏たちが主張してきた「場の語用論」が新しい形をなしたとすることができる。その成果は、評者も含めた読者に任せられることになるであろう。さらに、今後に期待される分野としては、「歴史語用論」や「言語獲得」の論考に目を向けるのが必須となってくるであろう。

参考文献（本書で挙げられている著作と論文は除く。評者が新たに参照したもののみ）

- 廣瀬幸生. 2016. 「第11章 主観性と言語使用の三層モデル」, 中村芳久・上原聡（編）『ラネカーの（間）主観性とその展開』, 333-355, 東京：開拓社.
- 伊丹敬之. 1999. 『場のマネジメント』, 東京：NTT出版.
- 伊丹敬之. 2005. 『場の論理とマネジメント』, 東京：東洋経済新報社.
- カーカップ ジェイムズ・中野道雄. 1973. 『日本文学英訳の優雅な技術』, 東京：研究社.
- 中村芳久. 2009. 「認知モードの射程」坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明（編）, 『「内」と「外」の言語学』, 353-393, 東京：開拓社.
- 中村芳久. 2016. 「第1章 Langackerの視点構図と（間）主観性」中村芳久・上原聡（編）『ラネカーの（間）主観性とその展開』, 1-51, 東京：開拓社.
- Sperber, D. 2000. "Introduction." In Dan Sperber (ed.) *Metarepresentations: A Multidisciplinary Perspective*, 3-13. Oxford: Oxford University Press.
- 田中廣明. 2019. 「指示解決—自己中心性と共通基盤化—」, 田中廣明・秦かおり・吉田悦子・山口征孝（編）『動的語用論の構築へ向けて 第1巻』, 18-46, 東京：開拓社.
- 露木恵美子. 2019. 「場と知識創造—現象学的アプローチによる集团的創造性を促す「場」の理論に構築に向けて」『研究技術計画』34(1), 39-57, 中央大学.
- 上原聡. 2016. 「第3章 ラネカーの subjectivity 理論における「主体性」と「主観性」—言語類型論の観点から—」, 中村芳久・上原聡（編）『ラネカーの（間）主観性とその展開』, 53-89, 東京：開拓社.